

機関番号：17501

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009 ~ 2010

課題番号：21790596

研究課題名 (和文) 高齢者の社会活動に関わるソーシャル・キャピタルの類型化  
及び地域差の検討研究課題名 (英文) The relationship between social capital and social activities  
in two community dwelling older adults in Japan

研究代表者

李 相侖 (Sangyoon LEE)

大分大学・福祉科学研究センター・講師

研究者番号：90466194

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、高齢者の社会活動性とソーシャル・キャピタルの現状を把握し、社会的ネットワークなど社会的要因との関連を明らかにすることを目的とした。ソーシャル・キャピタルや社会的ネットワークは立地特性による差異が大きいと考えられるため、コミュニティの立地特性が異なる都心（千代田区）と大都市郊外（埼玉県鳩山町）という2地点を選定した。調査対象者は地域に居住する在宅高齢者を対象に、郵送法による自記式調査を行った。

分析の結果、1) 高齢者の社会的ネットワークの場合、都心と比べると大都市郊外の方が、社会的ネットワークが強い傾向がみられた。高齢者の社会活動については、活動内容によって地域による回答の差がみられた。2) 多変量分析から、都心に居住する人や75歳以上の後期高齢者の人、社会的ネットワークが強い人、社会活動をしている人ほど、ソーシャル・キャピタルが高いことが明らかになった。今回の調査から、ソーシャル・キャピタルでは地域における人間関係、情緒的および手段的サポートが重要であることが示された。社会活動の場合、活動の内容によってソーシャル・キャピタルに及ぼす影響に差が生じる可能性があり、今後、地域行事、ボランティア活動など、公共性の高い活動における参加の勧奨が必要であることが示唆された。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this study is to explore the current state of social capital and the current participation in social activities of the elderly, and to clarify the relationship between social factors and social networks. Because the individual variation in social capital levels and social networks are driven by geographical convenience properties, we selected two areas with different characteristics of community location that one is an urban center located in Chiyoda ward, Tokyo and the other is a suburban area located in Hatoyama-cho, Saitama. The study subjects were independently living elderly people who live in two areas, and the self-reported survey data was collected through mailed questionnaire. As a result of analyses, the suburban area indicated stronger social networks than the urban center. In the case of social activities of the elderly people, it was different properties between two areas depending on contents of social activity. Social capital tended to be high that the person who have social networks, participated social activities, live urban center and are the 75 years or older. In this study, the relationships with neighborhood, emotional or instrumental support were shown to be important to boost social capital in the community. The results also suggest that different contents of social activities may have different effect to social capital. It was suggested that promotion of participation in activities related to community, such as local events and volunteers, were necessary to increase social capital.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：社会医学・公衆衛生学・健康科学

キーワード：ソーシャル・キャピタル，高齢者の社会活動，社会的ネットワーク，健康指標

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 高齢期のウェルビーイング (well-being) の増進に向けて，高齢者の社会活動の参加への関心が高まり，ここ数年間では横断・縦断分析を用い，社会活動への参加が身体的及び精神的健康度との正の関連性を報告する研究が数多く見られる．では実際，どのような人が社会活動に参加しているだろうか．高齢者の社会活動への参加の有無における先行研究によると，活動への参加が性，年齢，社会・経済的地位，健康度との関連や，親戚や友人との付き合いなどの社会的ネットワークとの関連が報告されている (Wilson & Musick, 1997; Morow-Howell et al., 2003)．中高齢者におけるボランティア活動への参加有無についての研究代表者の研究でも一部類似な結果は得られているものの，その他の関連要因として居住期間，家族構成，趣味・学習活動への参加の有無も抽出された．しかし，一部の要因に関しては必ずしも一貫した結果は得られておらず，その理由の一つとして地域差の影響が考えられる．

(2) 一方，市民と行政による協働のまちづくりを推進するため，原動力となる地域力の基礎をなす概念として，ソーシャル・キャピタルに関心が寄せられている．内閣府による「個人の信頼・ネットワーク・社会活動」と「自分たちの暮らしとコミュニティに対する現状認識」についての調査によると，社会活動のうち，ボランティア活動への参加の多い人は自分のコミュニティに対し辛口の評価 (住みにくい，安全でない，活気がない等) をする傾向があるのに対し，地縁活動参加の多い人は逆に甘口評価であり，活動の種類とコミュニティに対する評価の違いが示された．しかし，これらは限定した活動 (ボラン

ティア，地縁活動，スポーツ等活動) とコミュニティへの評価との関係を探る調査結果であり，特に社会参加が求められている高齢者に限った社会活動性とソーシャル・キャピタルにおける関連を結論つけることは難しい．

(3) そこで本研究では，コミュニティの立地特性が異なる都心と大都市郊外という2地点に居住する60歳以上の在宅高齢者を対象に，高齢者の社会活動性とソーシャル・キャピタルを調査し，比較・検討することを目的とした．個人の特性だけではなく，社会的ネットワークなど心理・社会的要因を考慮して分析を行う．

### 2. 研究の目的

(1) 都心と大都市郊外の地域における高齢者の社会活動性や社会的ネットワークの現状を調査すること

(2) 社会活動性とネットワーク，ソーシャル・キャピタルにおける関連を調べること

(3) 社会活動性を踏まえたソーシャル・キャピタルの特徴や関連要因を把握すること

の3点を明らかにすることを目的とする．

### 3. 研究の方法

#### (1) 調査対象者の抽出

本調査の対象者においては，都心である東京都千代田区 (以下，千代田区) と埼玉県比企郡鳩山町 (以下，鳩山町) に住民票を有する在宅住民のうち，調査への協力を承諾した

住民とした。千代田区の場合、住民台帳名簿から無作為抽出により65歳以上の1,000名を選定した。鳩山町の場合、2007年に行った社会活動調査の対象者および新たに55歳以上となった住民から1/3抽出した2,235名を対象とした。

## (2) 測定項目

①社会活動性：本研究では高齢者の社会活動を『家庭外での対人活動』と操作的定義した。社会活動性の指標については、橋本ら(1997)の「いきいき社会活動チェック表」を用いる。高齢者の社会活動性指標で最も多く使われている尺度として、社会奉仕活動、個人活動、学習活動、就労有無の4つの側面からとらえ、側面ごとに得点化し、活動の実施状況を測定する。本調査ではそれぞれの項目に関して「(よく、時々)する」=1、「ほとんどしない」=0とし、得点化を行った。得点が高いほど、社会活動性が高いことを示す。

②ソーシャル・キャピタル：本調査では、藤澤ら(2007)の測定項目を用いる。先行研究と専門家による検討から作成されたスケールであり、「地域安全」、「手助けの程度」、「留守世話」、「医療機関へのアクセス」、「挨拶等近所付き合い」、「住み続けたい希望」の6つの項目を用い、各質問に対して「そう思う」～「そうは思わない」の5段階により、回答を求めた。得点が高いほど、ソーシャル・キャピタルが高いことを示す。

③社会的ネットワーク：あなたの心配事や悩み事を聞いてくれる人がいるかどうか、ちょっとした用事や留守番を頼める人がいるかどうかを聞いた。以下、前者を情緒的サポート、後者を手段的サポートとする。それぞれ、「いない」=0、「いる」=1の2択で質問した。

④その他：性、年齢（「前期高齢者(65～74歳)」、「後期高齢者(75歳以上)」）、健康度自己評価（「健康ではない」～「非常に健康だと思う」）の4段階。

## (3) 調査実施

調査票の作成にあたり、先行研究や、研究代表者が所属していた東京都健康長寿医療センター研究所（東京都老人総合研究所）社会参加と地域保健研究チームで、筆者の主な担当地域であった埼玉県を対象とした「中高齢者の社会活動」におけるこれまでの研究を参考とした。また、予備調査で千代田区と埼玉県のそれぞれの地域に合わせた項目および調査票構成の修正を行った。本調査票を郵

送後、一定期間をおいた後に、対象者への協力御礼および未回答者への調査の回答を改めてお願いするために、葉書を郵送した。

## (4) 回収率および分析対象者

千代田区は1000名のうち、47.1% (471名)、鳩山町は2,235名のうち、62.6% (1,400名)の回収率であった。回収された調査票から調査に協力できない理由を記入があった人、かつ、代理回答の場合は分析から除いた。したがって、千代田区の有効回答率は42.9%、鳩山町は61.6%である。

また、両地域の比較のため、本報告書では65歳以上の人を分析対象とした。

## (5) 分析方法

2変量による分析には名義尺度は $\chi^2$ 検定、順位尺度にはウィルコクソンの順位和検定、そして間隔尺度の検定は $t$ 検定を用いた。

性、年齢等、上記の変数を独立変数として一括投入するロジスティック回帰分析を行った(モデル1)。なお、性、年齢においては交互作用の有意差を検討した(モデル2)。

統計的解析にはSPSS/ver.19.0 for Windowsを使用した。

## (6) 研究における倫理上の配慮

対象者が調査に応じるかどうか、あるいはこれらの調査を途中で止めるかどうかは、あくまでも本人の自主的な判断によるものとし、決して強制せず、対象者の意志を尊重した。回収された調査票に関しては厳重に保管し、データセットの際には、個人情報は一切いれず、統計的に処理・分析した。上記すべての内容は調査票等にわかりやすく説明文を入れ、調査への理解を求めた。なお、本研究計画については、東京都健康長寿医療センター研究所の倫理委員会により承諾を得ている(平成21年度第3回倫理委員会受付番号41)。

## 4. 研究成果

### (1) 個人特性【表1上】

①性：千代田区の場合、男性は44.2%で、前期高齢者は52.1%であった。表には示さないが、平均年齢は男性74.5歳、女性75.7歳で年齢の有意差はみられなかった。

鳩山町の場合、男性は51.0%であり、前期高齢者は69.3%であった。表には示さないが、後期高齢者で女性が多い傾向が見られた( $p<0.001$ )。

表1.地域別の対象者の特性と社会的ネットワーク、ソーシャルキャピタルの比較

			鳩山	千代田	p
性	男性	n	381	185	.025
		%	51.0%	44.2%	
	女性	n	366	234	
		%	49.0%	55.8%	
年齢	前期(65-74)高齢者	n	526	220	.000
		%	69.3%	52.1%	
	後期(75-)高齢者	n	233	202	
		%	30.7%	47.9%	
健康度自己評価	非常に健康だと思う	平均	2.8	2.8	0.371
		n	78	48	
		%	10.5%	12.2%	
	まあ健康な方だと思う	n	506	265	
		%	67.9%	67.4%	
	あまり健康ではない	n	98	51	
		%	13.2%	13.0%	
	健康ではない	n	63	29	
%		8.5%	7.4%		
社会的ネットワーク	心配事や悩み事を聞いてくれる人	いる	n 687	303	.013
		%	91.0%	86.1%	
	いない	n	68	49	
		%	9.0%	13.9%	
ちょっとした用事や留守番を頼める人	いる	n	559	216	.003
		%	74.0%	65.1%	
	いない	n	196	116	
		%	26.0%	34.9%	
ソーシャルキャピタル		平均	16.0	17.8	0.000
	17点未満*	n	326	125	0.000
		%	50.2%	33.8%	
	17点以上	n	323	245	
		%	49.8%	66.2%	
社会活動性	社会奉仕活動	平均	1.9	1.8	0.691
	個人活動	平均	6.0	5.8	0.211
	学習活動	平均	.6	.8	0.005

a 平均は16.7であるが、実数は定数であるため、17点で分けた。

## (2) 社会的ネットワークにおける検討

- ①性：情緒的サポートと手段的サポート両方とも男性より女性でサポートを得られている人が多かった(それぞれ、男 83.0% vs. 女 95.4%,  $p<0.001$ ; 66.3% vs. 75.7%,  $P=0.001$ )。
- ②年齢：情緒的サポートは9割弱、手段的サポートは約7割の人がサポートを得られており、統計的に有意な差はみられなかった。
- ③地域【表1中】：情緒的サポートと手段的サポート両方とも千代田区より鳩山町でサポートを得られている人が多かった(それぞれ、鳩山 91.0% vs. 千代田区 86.1%,  $p=0.013$ ; 74.0% vs. 65.1%,  $p=0.003$ )。

## (3) 社会活動の側面における検討

- ①性：項目別にみると、社会奉仕活動では有意な差がみられず、個人活動では女性で近所づきあいが高く(男 68.4% vs. 女 81.8%,  $p<0.001$ , 以下、同様)、デパート等での買い物(60.7% vs. 73.6%,  $p<0.001$ )、近隣訪問をしている人が多かった(63.3% vs. 73.4%,  $p<0.001$ )。スポーツ活動やレクリエーション活動に関しては男性が多くみられた(それぞれ、61.4% vs. 52.1%,  $p=0.003$ ; 46.4% vs. 36.0%,  $p=0.001$ )。学習活動に関してはカルチャーセンターでの活動は女性が多く(14.0% vs. 23.1%,  $p<0.001$ )、シルバー人材

センターでは男性が多かった(10.8% vs. 6.4%,  $p=0.012$ )。側面別の得点による検討では、どの側面も有意な差は見られなかった。

②年齢：項目からみると、社会奉仕活動側面では地域行事への参加(前期高齢者 46.8% vs. 後期高齢者 34.0%,  $p<0.001$ )、町内会・自治会活動(43.5% vs. 35.9%,  $p=0.023$ )、趣味等の活動(55.7% vs. 44.5%,  $p=0.001$ )、社会奉仕活動(30.2% vs. 23.8%,  $p=0.036$ )、特技等を他人に伝える活動(22.6% vs. 16.2%,  $p=0.021$ )で前期高齢者が後期高齢者より多く参加していた。老人クラブ活動においては、後期高齢者の参加が高かった(14.1% vs. 27.3%,  $p<0.001$ )。個人活動側面の場合は、生活用品等の買い物(93.2% vs. 87.4%,  $p=0.001$ )、近隣訪問(71.5% vs. 62.3%,  $p=0.003$ )、遠方訪問(64.6% vs. 43.5%,  $p<0.001$ )、国内旅行(73.4% vs. 49.9%,  $p<0.001$ )、海外旅行(23.7% vs. 11.6%,  $p<0.001$ )、スポーツ(63.9% vs. 42.7%,  $p<0.001$ )、レクリエーション活動(47.5% vs. 27.4%,  $p<0.001$ )において、前期高齢者が後期高齢者より多く参加していた。

学習活動側面の場合、後期高齢者が老人大学等の参加(12.0% vs. 19.1%,  $p=0.002$ )が高く、カルチャーセンターでの活動(20.8% vs. 13.8%,  $p=0.006$ )講演会等への参加(36.1% vs. 29.3%,  $p=0.026$ )では前期高齢者の参加が高くみられた。

側面別の得点による検討では、社会奉仕活動、個人活動、学習活動のすべての側面で前期高齢者の平均が高かった(それぞれ、前期高齢者 2.0 vs. 後期高齢者 1.5,  $p<0.001$ ; 6.4 vs. 5.0  $p<0.001$ ; 0.7 vs. 0.6,  $p=0.013$ )。

③地域【表2】：項目からみると、社会奉仕活動側面の場合、地域行事への参加は鳩山町より千代田区のほうが高かった(鳩山町 40.1% vs. 千代田区 46.9%,  $p=0.035$ )。一方、社会奉仕活動では千代田区より鳩山町が高くみられた(54.7% vs. 47.1%,  $p=0.020$ )。個人活動側面の場合、近所づきあい(79.5% vs. 67.1%,  $p<0.001$ )、生活用品等の買い物(93.0% vs. 87.9%,  $p=0.005$ )、近隣訪問(73.9% vs. 58.4%,  $p<0.001$ )、遠方訪問(61.6% vs. 50.5%,  $p=0.001$ )では千代田区より鳩山町が高かった。一方、デパートでの買い物(62.6% vs. 75.7%,  $p<0.001$ )、海外旅行(16.6% vs. 25.1%,  $p=0.001$ )、お寺まいり(62.0% vs. 75.1%,  $p<0.001$ )鳩山町より千代田区が高くみられた。

学習活動側面の場合、鳩山町より千代田区が老人大学等への参加が高い回答が得られた(15.7% vs. 23.2%,  $p=0.003$ )。

側面別の得点による検討【表1下】では、学習活動のみ、鳩山町より千代田区の平均が高かった(鳩山町 0.6 vs. 千代田区 0.8,  $p=0.005$ )。

表2.地域別の社会活動の側面別の分布

		鳩山	千代田	p		
社会奉仕 地域行事活動	している	n 261 % 40.1%	173 46.9%	.035		
	町内会や自治会活動	している	n 258 % 40.8%	152 41.6%	.784	
	老人会活動	している	n 121 % 19.5%	59 16.9%	.301	
	趣味等の仲間うちの活動	している	n 354 % 54.7%	169 47.1%	.020	
	社会福祉・奉仕活動	している	n 169 % 27.2%	106 29.6%	.413	
	特技や経験を他人に伝える活動	している	n 130 % 21.3%	67 19.0%	.399	
	消費者、自然環境保護等の活動	している	n 63 % 10.4%	32 9.2%	.570	
	個人活動	近所づきあい	している	n 550 % 79.5%	251 67.1%	.000
近所での買い物		している	n 649 % 93.0%	334 87.9%	.005	
デパートでの買い物		している	n 416 % 62.6%	287 75.7%	.000	
近くの友人・親せき訪問		している	n 499 % 73.9%	215 58.4%	.000	
遠方の友人・親せき訪問		している	n 400 % 61.6%	184 50.5%	.001	
国内旅行		している	n 446 % 66.9%	235 63.2%	.230	
海外旅行		している	n 105 % 16.6%	93 25.1%	.001	
お寺まいり		している	n 408 % 62.0%	283 75.1%	.000	
スポーツや運動		している	n 385 % 58.9%	197 53.0%	.066	
レクリエーション活動		している	n 265 % 41.3%	149 40.4%	.765	
学習活動		老人学級・大学への参加	している	n 96 % 14.3%	57 14.9%	.799
		カルチャーセンターでの学習活動	している	n 103 % 15.7%	88 23.2%	.003
		研修会・講演会	している	n 213 % 31.6%	145 37.5%	.054
		シルバー人材センター	している	n 50 % 7.6%	38 10.1%	.160

- (4) ソーシャル・キャピタルにおける検討  
 ①性： ソーシャル・キャピタルは男性より女性が高かった（男 16.2 vs. 女 17.2,  $P<0.001$ ）.  
 ②年齢： ソーシャル・キャピタルは前期高齢者より後期高齢者に高くみられた（前期 16.3, 後期 17.5,  $p<0.001$ ）.  
 ③地域【表 1 下】： ソーシャル・キャピタルは鳩山町より千代田区で高くみられた（鳩山 16.0, 千代田区 17.8,  $p<0.001$ ）.

- (5) 性, 年齢, 地域を用いたソーシャル・キャピタルの社会活動における影響【表 3】  
 ソーシャル・キャピタルを平均値で二分化し, ロジスティック分析を行った. モデル 1

は性, 年齢, 情緒的支持, 手段的支持, 地域, 健康度自己評価, 社会活動性の 3 側面を説明変数とした. また, モデル 2 では性と年齢の相互作用を投入した.

その結果, 前期高齢者より後期高齢者のほど, 情緒的および手段的支持を得ている人のほどソーシャル・キャピタルが高い傾向が見られた. 社会活動性では, 社会奉仕活動および個人活動をしている人のほど, ソーシャル・キャピタルが高かった. 地域においては, 鳩山町より千代田区のほうが高くみられた. 性と年齢の相互作用の有意な差はみられなかった.

表3. ソーシャルキャピタルを従属変数としたロジスティック分析

モデル1		B	オッズ比	オッズ比の 95% CI		p
				下限	上限	
性	ref. 男	.252	1.286	.915	1.809	.148
年齢	ref. 前期	.778	2.176	1.438	3.294	.000
健康度自己評価		.171	1.186	.913	1.541	.202
情緒的支持	ref. いない	.730	2.075	1.033	4.170	.040
手段的支持	ref. いない	.683	1.981	1.334	2.940	.001
社会奉仕活動		.175	1.191	1.060	1.339	.003
個人活動		.116	1.123	1.025	1.229	.012
学習活動		-.071	.932	.764	1.136	.486
地域	ref. 鳩山町	.802	2.230	1.531	3.248	.000
-2 対数尤度		798.699				
Hosmer と Lemeshow の検定		p=0.335				
モデル2		B	オッズ比	オッズ比の 95% CI		p
				下限	上限	
性	ref. 男	.193	1.213	.819	1.797	.336
年齢	ref. 前期	.663	1.940	1.104	3.409	.021
健康度自己評価		.166	1.181	.908	1.535	.215
情緒的支持	ref. いない	.716	2.047	1.018	4.115	.044
手段的支持	ref. いない	.681	1.976	1.331	2.934	.001
社会奉仕活動		.177	1.193	1.061	1.341	.003
個人活動		.118	1.126	1.028	1.233	.011
学習活動		-.072	.930	.763	1.134	.475
地域	ref. 鳩山町	.808	2.244	1.540	3.272	.000
性*年齢		.232	1.261	.580	2.742	.559
-2 対数尤度		798.356				
Hosmer と Lemeshow の検定		p=0.277				

従属変数のソーシャルキャピタルは平均値(16.7)で二分化し, 投入.

(6) 考察および結論

①社会的ネットワークの地域における差について

情緒的支持と手段的支持両方とも千代田区より鳩山町でサポートを得られている人が多かった. 都心と大都市郊外地域での近所づきあいには密度や強度の差があるとされ, 今回の調査でも同様の結果が得られた.

また, 埼玉県鳩山町は 70 年代以降宅地開発が進んだニュータウンと本村からなり, 本村のほうが地域のつながりが強いと考え, このような差が結果に差を生じたとも推察される.

②社会活動性の地域における差について

社会奉仕活動においては, 両地域においてほぼ同じであった. しかし, 地域行事や有意な差はみられないが, ボランティア活動に関

しては、千代田区のほうが活動している割合が高かった。また、老人会や趣味等の活動に関しては鳩山町が高くみられた。

個人活動に関しては、近所づきあい、友人親せき訪問等に関しては、鳩山町が高く、デパートでの買い物、海外旅行は千代田区が高くみられた。

学習活動では千代田区が高くみられた。

以上のことから、公共性の高い活動、知的活動は千代田区が高く、個人的活動では鳩山町が高いことが明らかになった。

活動のなかでは、地域環境との関連がある可能性が高く、例えば、デパートのような大型マーケットは鳩山町近辺にはないことが差異を生じた原因と考えられる。

## ②ソーシャル・キャピタルの地域における差について

ソーシャル・キャピタルを従属変数とした結果、社会的ネットワークがある人でソーシャル・キャピタルが高いことが明らかになった。社会活動性の中では、社会奉仕活動が高いほど、個人活動が高いほどソーシャル・キャピタルが高かった。

ソーシャル・キャピタルの定義は未だに定まってないが、Putnamによるとソーシャル・キャピタルは、「社会の効率性を改善し、協調行動を促すことのできる信頼、規範、ネットワークといった社会組織の特性」と定義されている。今回の調査から、地域でのソーシャル・キャピタルでは地域における人間関係、ソーシャルサポートが重要であることが示された。市民参加のネットワークを作るための工夫により、地域におけるゆるい繋がり形成を促進することが必要と考える。また、社会活動の場合、活動の内容によって差が生じる可能性があり、今後、公共性の高い活動の勧奨が必要と考える。

## (7) 今後の課題

今回の調査は都心、大都市郊外部の特性を持つ地域間の比較であり、今後、複数の地域からの調査により、その関連要因について重ねて検討・追証する必要がある。本調査の分析から、ソーシャル・キャピタルは地域によって差があることが明らかとなかった。その理由として、地域のネットワークの性格の違い、地域環境の影響が考えられ、今後、これらの変数を考慮した調査が必要と考える。本調査の結果は、学術大会での発表等を通じ、

研究結果を社会に還元していく予定である。

なお、今回の調査は横断調査であり、ソーシャル・キャピタルに関わる要因との因果関係を明らかにするため、今後、縦断研究の必要性がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

① 新開省二, 渡辺直紀, 吉田裕人, 藤原佳典, 天野秀紀, 李相侖, 西真理子, 土屋由美子: 要介護状態化リスクのスクリーニングに関する研究—介護予防チェックリストの開発—. 日本公衆衛生雑誌, 2010, 57(5), 345-354

〔学会発表〕(計4件)

① 李相侖. 農山村地域における在宅高齢者の地域での社会活動と移手段- 大分市C校区の実態調査から -第119回日本社会政策学会,名古屋, 2009年10月31日-11月1日.

② S Lee, S Shinkai, Y Fujiwara, H Yoshida, Y Kousa, T Fukaya. Frequency of going outdoors and subjective well-being among older adults in Japan: A 5-year longitudinal study. 19th World Congress of Gerontology & Geriatrics, France, Paris, 5<sup>th</sup>-9<sup>th</sup> July, 2009.

③ 小宇佐陽子, 新開省二, 李相侖, 深谷太郎, 藤原佳典, 吉田裕人, 渡辺直紀, 天野秀紀. 住民ボランティアの育成を通じ地域福祉の向上をねらう介入研究 (1) 鳩山町健康づくり支援者の活動と今後の課題. 第51回日本老年社会学会大会, 横浜, 2009年6月18日-20日.

④ 李相侖, 新開省二, 小宇佐陽子, 宮山裕子, 山口喜代美, 深谷太郎, 藤原佳典, 吉田裕人. 住民ボランティアの育成を通じ地域福祉の向上をねらう介入研究 - (2) 孤立感と社会心理的要因との横断的分析. 第51回日本老年社会学会大会, 横浜, 2009年6月18日-20日.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

李 相侖 (Sangyoon LEE)

大分大学・福祉科学研究センター・講師

研究者番号: 90466194